

小特集 〈移動〉を描く

トランスローカリティはどのように 〈移動〉を描けるのか

高 橋 薫

1 〈移動〉とローカルの再構築

「より良い暮らし」を求めて海外への移住を選択することは日本人においても、もはや特異の事象ではなく、多くの在外邦人研究が、世界のあらゆる土地で生活する日本人の複雑なアイデンティティ交渉についての事例を蓄積してきた。芝野 (2022) はグアムという土地の固有性およびライフスタイル移住の再生産という視点を通じ、トランスナショナルなモビリティを有しながらも日本／グアム双方の社会から周縁化された「グローバル・ノンエリート」とされる新二世が経験する苦悩を、調査対象と著者との間で長期にわたって緊密に構築された信頼関係に基づき丁寧に描いている。

私自身、南東ロンドンで暮らす日本人女性のコミュニティをフィールドとする研究者として、海外日本人社会研究には日本人が想像する「日本人」の枠組みへの挑戦という意義があると考えている。この点において芝野 (2022) による『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー』は、日本社会として見えてこなかった（見ようとして来なかった）多様な背景をもつ「日本人」の存在を、対象ひとりひとりの葛藤に寄り添い鮮明に浮き彫りにし、読者への新たな気づきを与えている。こうした個人的経験を通して社会全体の構造的課題に光をあてるアプローチは、社会学や移動研究の専門書としてだけでなく、エスノグラフィーや海外移住など、より広範な

テーマに関心のある初学者層にもアクセスしやすく、社会学的想像力を喚起させる読み物として貴重であると感じた。

本稿では本書で得られた土地の固有性がグローバルな文脈で主体の経験を構築するという示唆を受けて、トランスローカリティという概念的枠組みがどのようにして〈移動〉¹を描くことができるのかを整理・検討してみたい。

2 トランスローカリティ概念の軌跡

『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー』（芝野 2022）で新二世の経験や語りを構成していたのがアメリカ合衆国ではなくグアムであったように、国家よりも小規模の場所の固有性（歴史・政治・社会・文化・風土）やそこに根差した人的ネットワークが人の移動やアイデンティティ交渉に重要な役割を果たしていることは明白である。グローバル化する社会でのヒト・モノ・情報の越境的な移動について、その多元性や複雑性をより理解すべく、人文地理学や文化人類学・社会学など複数分野の研究者達の間で90年代半ばより見られるようになった概念的枠組みがトランスローカリティである（Greiner and Sakdapolrak 2013）。トランスナショナリズムは、人の帰属意識が国家・地域という既存の境界を越えて脱領域的に形成される現象の理解を可能にしたが、トランスローカリティはさらに、そうした「脱領域化」のなかにおいても、特定の都市・村・近隣地区・家など、よりスケールの小さな「場」が依然として特別な意味を持ち続け、主体が多元的な帰属意識を構成する様を描く概念として発展された（Conradson and McKay 2007, Stachowski and Bock 2021）。注視すべきは、トランスローカリティはトランスナショナリズムに相反・置換する概

¹ 本稿で移動を〈〉付で表記しているのは、移動を海外移住のような物理的移動に限定せず、ライフステージの推移に伴うアイデンティティや帰属意識の変容など、多様な形で主体によって経験される内面的な揺れ動きについて、理解し描くためのトランスローカリティの有効性を考察するためである。この移動の多義性については、本小特集の森田による「〈移動〉を描く——『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー：新二世のライフコースと日本をめぐる経験』を起点に」（2023a）、および芝野（2023）の論考も参照されたい。

念ではなく (Hall and Datta 2010, White 2011, Greiner and Sakdapolrak 2013)、動的でグローバルな〈移動〉の中で見過ごされてきた静的な状態²への理解を補完する役割を果たすことが期待されている点である。

トランスローカリティという言葉はアパデュライが著書『さまよえる近代』(2004)において、「ある場所に根差したコミュニティがその住民の地理的な移動によって、特定の送り手と受け入れ先の文脈を超えて拡張される現象」を描写するのに用いた造語である (Conradson & McKay 2015: 168)。そこではローカリティとは「本来的に瓦解しやすい社会的達成」(アパデュライ 1996=2004: 319)と捉えられており、つまり単に空間的・時間的に固定・限定された地理的領域を指す、グローバルの対義語としてではなく、ある空間において社会的な共同体による集合的实践を通して生産され、また同時にその主体を作るものとして理解されている (吉見 2004)。よって人がグローバルな移動をするとき、ローカルは解体されその意味を失ってしまうのではなく、グローバルな文脈の中で再解釈・再構築されて、主体の社会实践を通して生きていくのだ。ローカルを単なる地図上に見出される場所ではなく、社会的な関係性によって生産されるプロセスとし、また反対にローカリティが主体の経験やアイデンティティを再構成しうる相関関係への視座は、グローバル化する世界で複数の社会とのつながりを多元的に生きる人々の日常を理解するのに有効な枠組みとして、多くの移民研究者達に支持されてきた。

例えば McKay (2007, 2010) は、フィリピンのルソン島山間部の先住民が香港へ移住をした後もかつての共同体生活での信仰に基づく互恵的価値観を日常の行動規範とし、母国の家族への物質的・経済的援助 (ローカリティのトランスナショナルな実践) が、兄妹たちの更なる国内外への移住 (グローバルな移動) を促す様子を明らかにした。また Robertson (2018)

² これらの静的な状態については situatedness (Greiner and Sakdapolark 2013), sedentary (McKay 2006), social anchoring (Stachowski and Bock 2021), rooted (ハージ 2015=2022) などの言葉で表現されてきている。

は、オーストラリアのメルボルンに暮らす留学生がローカル／トランスナショナル両方で展開される多様な友人関係の中で新たな価値観・習慣・文化を獲得または変容させることで、複数のローカリティに帰属するアイデンティティ (translocal subjectivities³) を交渉する様子を描いた。ここでトランスローカリティは、直線的でトランスナショナルな移動そのものではなく、ローカル／ホームそれぞれとの心理的距離がゆらぐ過程を描くことのできる概念として評価されている。私の研究では、南東ロンドンの白人中産階級層が多く居住するエリアで暮らす日本人女性達が抱く地域への強い帰属意識を理解する枠組みとして用いた (Takahashi 2022)。彼女達の日常生活で表象されるオーガニックな食生活・多様性の尊重・アートへの関心といった価値観は、異なる人種・文化背景を持つ地域住民の間で時間をかけて共有・再生産されてきたものであり、ローカリティを社会的関係性の中で達成されるものと理解することで、移民コミュニティをエスニシティによってのみ形成される一枚岩なものではなく、より多元的な社会ネットワークが複雑に交錯していることが明らかになった。

3 越境する〈移動〉の主体性を描く

整理をすると、トランスローカリティという概念的枠組みには〈移動〉を描くことにおいて以下の貢献が期待できる。第一に、動的／静的な移動や、ナショナル／ローカルな帰属先などの単純化された二項対立からの脱却であり、「モビリティや移動、フロー、そしてこれらのダイナミクスが異なるスケール間のつながりを生み出す方法についての全体論的な視点」(Greiner and Sakdapolrak 2013: 376) をもたらすことである。ここには個人や集団を移動に駆り立てたり阻んだり、ある地点に留まらせたりするような、より巨大で不均衡な力関係⁴への視座も含まれている。第二に、

³ Conradson and McKay (2007) 参照。

⁴ 例えばグローバルな経済格差や、EU 域内での自由移動、またコロナ禍での水際対策による入国制限など、あらゆる構造的要因によって〈移動〉は促進および制御されている。

多元的な帰属意識を構築する、過去の思い出や記憶・現在の人間関係・未来への展望など、時空を超えて生じ経験される感情の役割が明らかにされることで (Ryan 2008, Svašek 2010)、〈移動〉において空間と時間の関係は必ずしも直線的および不可逆的ではないという知見が提供されることである。

こうしたローカリティの生産における感情的側面は、トランスローカリティという枠組みの理解の対象が〈移動〉の主体性にあることを際立たせる。それはまさに「どこに帰属をするのかではなく、どのように帰属をするのか」⁵を問う研究者側の立ち位置の表れでもある。芝野 (2022: 161) においては、日本への帰還移住を複数回試みるも断念せざるを得なかった新二世のツヨシさんがタトゥーを通してローカルな主体性の身体的表象を行っているストーリーが印象的であったが、このように人々がいかに愛着のある「場」を「生きて」いるのかを、ライフコースや社会情勢の変化と共に寄り添い観察する研究者の向き合い方を肯定することも、トランスローカリティの方法論的貢献だと考える。

見てきたようにトランスローカリティは、〈移動〉があらゆる二項対立の枠組みを超えて経験される流動的なものであることへの気づきを喚起させるが、これはさらに研究者の立場にも問いを投げかける。本稿で参照した先行研究が文化人類学・教育社会学・移動社会学・国際社会学・人文地理学と多岐分野にわたるように、研究者自身もまた、既存の学問の境界線を越えていく姿勢が求められているのだ。各学問の枠組み内で蓄積されてきた知見の範囲内では気づくことのできない視点も、分野を超えた幅広い対話を横断的に重ねていくことで、〈移動〉の複雑さや流動性の理解が可能となるということは、この学術講演会に向けての芝野氏・森田氏の事

⁵ 〈移動〉する人々の帰属の断片性についての議論における芝野氏の提言 (学術講演会 2022 年 12 月 19 日)。また本小特集「教条的ハイブリッド主義を超えて——〈移動〉する人々の帰属をめぐる経験を描くために」(芝野 2023) においても言及されている。

前会議を重ねる中でも実感された⁶。この点においても、トランスローカリティは〈移動〉を理解するための概念的枠組みに留まらず、それを「描く」研究者の、対象と自己との間にある垣根を越境する「複眼的なアプローチ」（吉見 2004: 383）を示唆するものであり、さらなる応用研究の発展が期待される。

【謝辞】

最後にこの場をお借りして、学術講演会および本小特集を企画・牽引いただいた芝野淳一氏・森田次朗氏に深く感謝申し上げます。幾度もの打ち合わせで交わされた議論は示唆と刺激に溢れ、まさに越境的なアプローチで考察する愉しみと可能性を体感し、本稿の執筆にも大きく生かされることとなりました。

【文献】

- Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalisation*. Minneapolis: University of Minnesota Press. (門田健一訳, 2004, 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社.)
- Conradson, David., and McKay, Deirdre, 2007, "Translocal Subjectivities: Mobility, Connection, Emotion," *Mobilities*, 2 (2) : 167-174.
- Greiner, Clemens., and Sakdapolrak, Patrick, 2013, "Translocality: Concepts, Applications and Emerging Research Perspectives," *Geography Compass*, 7 (5) : 373-384.
- Hage, Ghassan, 2015, *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*, Victoria: Melbourne University Publishing. (塩原良和・川端浩平 監修、前川真裕子・稲津秀樹・高橋進之介訳, 2022, 『オルター・ポリティクス

⁶ 例えばトランスローカリティの〈移動〉の中における静的な状態を見つめるまなざしは、「根ついている」という帰属感覚がエンパワメントとなり「人生を歩いていく」後押しになるというハージ (2015=2022: 349) の議論との親和性が強くうかがえ、これは森田 (2023b) が本小特集でも考察しているように、不登校研究や居場所研究への応用可能性が想起される。

——批判的人類学とラディカルな想像力』明石書店.)

Hall, S., and Datta, Ayona, 2010, "The translocal street: Shop signs and local multi-culture along the Walworth Road, south London," *City, Culture and Society*: 69-77.

McKay, Deirdre, 2006, "Introduction: Finding 'the Field': the Problem of Locality in a Mobile World," *The Asia Pacific Journal of Anthropology*, 7 (3) : 197-202.

McKay, Deirdre, 2007, "'Sending Dollars Shows Feeling'—Emotions and Economies in Filipino Migration," *Mobilities*, 2 (2) : 175-194.

McKay, Deirdre, 2010, "A Transnational Pig: Reconstituting Kinship Among Filipinos in Hong Kong," *The Asia Pacific Journal of Anthropology*, 11 (3-4) : 330-344.

森田次朗, 2023a, 「〈移動〉を描く——『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー: 新二世のライフコースと日本をめぐる経験』を起点に」『中京大学現代社会学部紀要』17 (1) : 89-96.

森田次朗, 2023b, 「教育社会学における〈移動〉をめぐる諸概念の応用可能性——実存的移動／グローバル・ノンエリート／ホーム」『中京大学現代社会学部紀要』17 (1) : 105-121.

Robertson, Shanthi, 2018, "Friendship networks and encounters in student-migrants' negotiations of translocal subjectivity," *Urban Studies*, 55 (3) : 538-553.

Ryan, Louise, 2008, "Navigating the Emotional Terrain of Families "Here" and "There": Women, Migration and the Management of Emotions," *Journal of Intercultural Studies*, 29 (3) : 299-313.

芝野淳一, 2022, 『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー——新二世のライフコースと日本をめぐる経験』ナカニシヤ出版.

芝野淳一, 2023, 「教条的ハイブリッド主義を超えて——〈移動〉する人々の帰属をめぐる経験を描くために」『中京大学現代社会学部紀要』17 (1) : 123-135.

Stachowski, Jakub., and Bock, Bettina, 2021, "Unsettled settlement? Translocal

social anchoring and patterns of (im) mobility among Polish families in rural Norway”, *Geoforum*, 126: 372-382.

Svašek, Maruška, 2010, “On the Move: Emotions and Human Mobility,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 36 (6) : 865-880.

Takahashi, Kaoru, 2022, “Navigating everyday life in a middle-class neighbourhood: The ongoing negotiations of Japanese women migrants in southeast London,” Shanthi Robertson and Rosie Roberts eds., *Rethinking Privilege and Social Mobility in Middle-Class Migration*. London: Routledge, 148-166.

White, Anne, 2011, “The mobility of Polish families in the West of England: Translocalism and attitudes to return,” *Politics, Languages & International Studies*, 1: 11-32.

吉見俊也, 2004, 「解説 グローバル化の多元的な解析のために—アパデュライの非決定論的アプローチ」 A. アパデュライ／門田健一訳『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』平凡社, 369-383. (Appadurai 1996=2004)